

◎實驗上の育兒(ついで)

醫學博士 瀨川昌著

生齒と病氣

▲増量の割合 哺乳兒の体量の増加は生後最初の六ヶ月はズン／＼肥つて早く増量するものであるが、夫れから後の六ヶ月は其の割合に目方が増えない、即ち目方の増え方が遅いのです、ソコで哺乳兒時代の増量の割合をお話し仕て置させよう前にも申した通り哺乳兒時代とは生後一年間位の事であるが月を重ねるに従ひ次第に増量の割合が減じて往く、左に示すは平均一日増量の標準で、之れを御覽になつても生後一ヶ月の平均一日の増量と十二ヶ月目の増量とは餘程比例が違ひます、之れは丹精して哺乳兒の体量を量る親々の御參考にもならうと思ひます

哺乳兒平均一日の増量

二十四

増量	同上日本 の目方	増量	同上日本 の目方
一月 二五瓦	六、八分厘	二月 二三瓦	六、二一分厘
三月 二二瓦	五、九四分厘	三月 二〇瓦	五、四〇分厘
五月 一五瓦	四、〇五分厘	六月 一四瓦	三、七八分厘
七月 一二瓦	三、二四分厘	八月 一〇瓦	二、七〇分厘
九月 九瓦	二、四三分厘	十月 八瓦	二、一六分厘
十一月 八瓦	二、一六分厘	十二月 六瓦	一、六二分厘

▲生齒と素人の考へ 哺乳兒は一定の標準通り

体量も増え健康で育つて往く内に生齒の時期となり哺乳兒は齒牙が生える様になる、一体此の時期は哺乳兒の身体に稍もすると變調を來すもので、健康な哺乳兒でも機嫌が悪く發熱などして病体に陥ることが有勝つもの、之を生齒困難といひ、齒の生へる時は容易くうまく生へ悪い事を申すのであります、素人の親達は此徴候を齒牙の生へる爲めだ、齒が齦の肉を突破つて出るから哺乳兒は

熱が發たり、機嫌が悪かつたりするのだ、齒の生へる爲めだから、少し位病状を呈しても害はない、驚くには及ばぬと斯う言つて左程心配せぬ人もなるが何うも斯んな考へで安心しすぎて打捨て置いては遂に生命に危険を及す様な事があるので、哺乳兒の爲めには餘程大切な場合であるから、此の生齒時期に病氣の模様が見えたら速に専門醫の診察を求めめるが宜い。

▲生齒困難の時期 哺乳兒が此一定の時期に發病する原因に就ては近頃醫師の間に種々な議論があつて、説は一定して居らぬが私は實驗上生齒の爲め斯くの如き疾病の起るものでないと信じます、夫れが證據にはまだ齒牙が生へぬ哺乳兒にも斯る徴候を呈する事は往々あるでありませんか尤も或る場合には齒の生へるので其の刺戟を蒙り身

体に斯る變調を生ずる事がないとも限らぬから、兎に角生後四五ヶ月目即ち門齒の生へる頃は母親なり保育者なり毎日哺乳兒の様子に振目なく注意を怠らず、様子が怪しいと思はゞ機敏に夫れを洞察し醫師の診斷を待つて差圖を受けるのが安全の策と考へる、左もなくして萬一油斷をなし俄に客體が變つて悪くなつたら取返しに付かぬ事のある時代です

生齒と病氣

▲生齒の遅き兒 齒牙は一定の規則によつて生へるものであるが、中には變則な生へ方の哺乳兒もある、夫れが證據には出生當時から既に齒のあるものもあるが、之れとても別に氣に懸ける事はない、唯偶然の出來事で、病氣の爲と云ふのでないから……去れど體質の脆弱なる哺乳兒は自

然齒の生へ方も遅い故、若し生べき時期を經過しても容易に其徴候なき時は或は身体發育上缺點なしとも限らぬから、如斯場合には一應醫師に健康診断を受ける必要がある、古しは齒牙の生へる前には、齒肉を切つて樂に齒の生へる爲めだと云つた時代もあつた、之れは何んの爲めかと云ふに、前回にも申述べた生齒困難の時期には哺乳兒が色々々の病氣に罹つて往々生命に危険を及ぼす事さへある此の原因をば齒の生へるので齶の肉を刺劇するため發熱などするのでたと斯う考へて、齒肉を切つたりしたのだケレども醫學の進歩した今日から、是れは誠に愚劣なる手段とより考へられない齒の生へる時の徴候は、熱が出たり、下痢したり、咳が出たり、涎を多く流したり、母親の乳首を噛んだり、ブツブを無暗に吹いたり、甚しきに至つ

ては痙攣たりする事もある、斯ういふ容子が見えたら間もなく齒の生へる事と思ふが宜しい

▲齒牙の生へ方 處で齒牙の生へる時期と其の順序をお咄し致さう、先づ第一に生へるのが下内門齒で之れは二枚眞白い奇麗な齒で、生後四ヶ月から十ヶ月間位迄に生へるのが通常なれど、稀には四ヶ月前にも、又十ヶ月後にも生へる事がある左れど孰れにしても此位の時期なら心配にならぬ第二番目には上内門齒が二枚、之は大略八ヶ月目から十二ヶ月目位の間に生へる、第三番目に下外門齒二枚、引續いて上外門齒同じく二枚、是等は一ケ年の畢りより二年目の五六ヶ月間には生へる事になつて居る、夫れから第一臼齒が四枚生へて次ぎに犬齒四枚、之れは第二年目のなかば過ぎから終り頃迄、第二臼齒四枚が生へるのは第二年

目の十ヶ月頃より第三年目のなかば頃迄、以上斯う云ふ順序に其の時期を考へれば誤りなきに近いのである

▲充分安眠せしめよ 初哺乳児の一般衛生法を

説明する前に、健康なる時の状態を述べやう、不健康なる哺乳児は必ならず此の状態に背いて居る事を心得ねばならぬ、先づ第一は睡眠の事です、

睡眠は發育上尤も大切なことで、睡眠を欠くやうでは、虚弱であるか、病氣があるか、何か健康

を害して居るに相違ない、故に哺乳児は夜分充分安眠し得る以上は晝間幾ら眠つても悪い事はない

睡眠の分には澤山眠らして置く事が良いのです、併し健康児の眠り方が

あるが夫れを次回に述べませ

う

睡眠と智慧付

睡眠と智慧付

▲晝寢 幼生児の間は唯モ一眠つて斗り居るが

哺乳児時代は夫れよりも稍睡眠の度を減する、併し

際立つては宜しくないもので夜間は充分に眠り尚

其外晝間も充分寝なければ悪い、晝寢は凡そ二

回位、一回でも熟睡するなら夫れでも不足はない

のです、万一晝寢をせぬならば四邊を静にして睡

眠を誘うやうにして、爾うして眠らず工夫をせね

ばならぬ、能く哺乳児によつては寝ないと機嫌の

大層悪い兒があるけれど、寝ない哺乳児なら必ず

身体何れの部分にか欠點があつて健体でないと推

案を下さなければならぬのです。

▲睡眠と健不健 處で哺乳児の眠り方が

あるのです、何ういふ眠り方なら健体な兒か、又た不健

体の兒か見分けを付けられるのです、睡眠は凡て

深く、穩かに、眠つて居る間の顔を見ると左も心

地よげに愛らしい面色をして居るのは是れ健体なる哺乳兒の眠り方である、然るに是れに反し寢て居ても折々妙な顔付をして、間には笑つて見たり爾うかと思へば、泣出したたり、能く眠つたと思ふと俄に覺たり、斯の如き調子で誠に眠りの穩かならぬは、身体に故障ある睡眠なりと思ひ決して油断してはなりません、母親とか保育者は小兒の一舉一動に就き注意を怠ることの出来ぬもので、如何なる方面からでも病氣の初期や、虚弱なる缺點を屹度發見する事の出来るものと心得られたい

▲手足を動かす 睡眠の重大な關係に續いて今度は哺乳兒の身体及精神の發育状態を述べやう、生兒が初めて生れたときは手足を屈めて居る、此姿勢は二三週間餘は崩さぬもので、夫れ以後になると初めて手足を伸すものです、一体手足を屈め

て居るのは是れ母親の胎内に居る時の姿勢にて成長するに従ひ、運動が盛んになるが、此運動は哺乳兒に意味のあるものでなく、足をバタ／＼行つたり、手をグ／＼動かしたりするのは全く無意味なる事であり、故に生後二三週間過ぎて手足を動かすやうになれば、絶間なく洗濯に動かし居る方が宜しい、餘り靜止して居るのは却つて虚弱な不健康な兒に多いのです。

▲哺乳兒の智慧付き 夫れから意識的に目の前の物を見、サモ欲しさうに手に取らうとしたりする迄には生後三四ヶ月を要します、斯うなると哺乳兒の愛が日に増し加はる、去れども是れより前に眞直ぐに自分の頭を保つやうになるもので之れが生後百日位寢て居ると頭を擡げるには二三ヶ月目の事です、四五ヶ月目に目の前の物を欲しが

やうなときはモー寢して置いても轉げ出します、五六ヶ月となれば打伏になる、實に哺乳兒の育つのは面白い程早いもので、打伏せになれば此時は首を擧げて手足を突張り爾うして多くは後方へ向つて這ひ出すものです (ついで)

幼稚園の保育と家庭に

於ける保育

和田 實

幼児保育に熟練なる保姆は、屢所々の幼稚園に於て見ないではないが、是等の人々が、皆悉く、家庭に於ても、亦幼稚園に於ける如く、熟練なる手腕を幼稚に對して顯はす否やは、疑問である、幼稚園では、熟練な保姆であつても、家庭に歸ると、年葉も行かぬ子守にも及ばぬ位な保姆が、隨

分わる様です、中には人の子は幼稚園で保育することは出来るが、自分の子を家庭で保育する術は、一向夢中である方も、可なりある様である、昔に積木や、ひもや打抜紙等の嚴然たる恩物が、必要ならばかりでなく、机腰掛の設備や、オルガンの備へが無くしては、保育が出来ぬと云ふ厄介な保姆が少くない様である、従つて多くの世人と云ふものは、幼稚園と云ふものが、普通の幼児保育場即ち人々の家庭に於て、當然行はれなければならぬ所の幼児保育を行つて居るものであると云ふことを知らないのです、勿論幼稚園には、机も腰掛も必要であり、諸種の恩物もなければなりません、然れど是等の設備が充分に完備しないからとて、二人や三人の幼児を相手に家庭で數時間の保育が出来ぬ様な事では、保育者としての價値は何處にありま